

滑らかな麒麟児

— 三浦玲一氏のこと —

佐野 泰雄

2013年10月9日。私は2012年4月からパリで仕事をしており、三浦玲一さんの闘病については全く知らなかった。パリにしようが、国立で通常通り業務を行っていたようが、三浦さんのためには無力であったことには変わりはないが、それでも好きだった同僚が病で苦しんでいる時、近くにいていささかでも情報に接し辛い思いを他の同僚たちと分かちあえたらよかったと思う。研究科長からの一斉メールによる突然の訃報を前に途方に暮れるだけだった私は、不当に取り残されたような気がしたものだ。

2012年の年末が近づいている頃だったか、勤務先のパリ国際大学都市の日本館でいくつかの出来事が重なり、館内のセキュリティ維持に特に積極的な複数の居住者から次のような要請があった。館内の公共スペースと居住空間とを隔てる内扉に、外部からの訪問者は居住者が招じ入れるまで内扉の外で待つように、という文言を記したプレートを作成し掲示してほしいというのである。もちろん内扉にはロックが掛かるようになっているのだが、居住者が解錠した後、扉が閉まりきる前に滑りこんでくる部外者が稀ではなかったからである。また、国際大学都市では一応フランス語が共通語になっているが、最近ではフランス語を解さない

関係者も増えてきているという事情を加味して、文言はフランス語ではなく英語で、という注文がさらについていた。プレートを設置する場所が場所なので、無謬の英語でなければならないだろう、ここは同僚の英語使いに相談しよう、という経緯があって久しぶりにメールで三浦さんに連絡をとった。12月4日から12月5日にかけて何本かのメールのやり取りの末、彼の提案になる Visitors Please do not step in without your host's escort. という文言を使わせてもらうことになった。ちなみに、その時ちょうど三浦さんは PhD の面接試験のためにシカゴに来ていたのだった。その後、彼とのやりとりはなくなった。だから、上の英文が三浦さんから最後に受け取った言葉ということになる。プレートを作成して内扉近くに掲示してから約10ヶ月後、三浦さんは亡くなった。彼の逝去後、内扉を開け閉めするたびに目に入る Please do not step in without your host's escort. という文言は、その日常的で陳腐な禁止を内容とする本来の意味を徐々に失い、その連続したアルファベットの字形のならばと、それをひとりごとのように発音した時の口触りが三浦さんを微かに表象するものとなった。

三浦さんに最後に会ったのは、2012年3月の研究科の会合だ。それから3年半も経ってしまったが、彼の響きの良い声、少しひねった知的な雄弁、チャーミングな独特の身のこなしが今なお鮮明に脳裏に浮かぶ。特に、なおも私の感官を揺らす、あの肉体的プレゼンスのすべすべした滑らかさ。頭が切れ仕事もよく出来る若い三浦さんは麒麟児とも言うべき人材であった。霊獣麒麟の体表の鱗との矛盾に擦ったい思いをしながら、私は密かに滑らかな麒麟児と呼んでいた。

おそらく2005年頃だと思うが、同僚と二人、研究科の業務で上海に出張することになった。その際、三浦さんが夫人とともに私費でわれわれに同行した。上海滞在中のある晩、四人で食事をした後、ホテルに帰る

タクシーの狭い空間のなかで私が言っただらない冗談に四人でけらけら笑い合った覚えがある。短いが、思い出すたびに幸せな気分にしてくれる記憶だ。

三浦さんが私に残した思い出は、総じて淡いが快いものだ。ただ、記憶の流れが夭折という事実に触れると、儂い色合が染み出す。致し方ないことなのだろう。